



国際化の最前線から



キャンプ誘致の活用法 ～ロンドン大会から学ぶ

株式会社 電通 2020 東京オリンピック・パラリンピック室部長 有賀 勝

第二回 キャンプから派生する取り組みが、地域のレガシーに

前号では、キャンプ誘致で実現したい目標の設定と、計画的な取り組みが大切、と書かせていただいた。戦略的にキャンプ誘致に取り組んだ自治体を2つご紹介する。

15 か国のパラリンピック・チームが、カーディフ市を中心としたウェールズで事前キャンプを行った。これは偶然ではない。ウェールズは、大会以前から共生社会実現の一環として障がい者スポーツの振興に取り組み、インフラ整備、選手発掘などに乗り出していた。そうした実績が評判を呼び、海外チームの方からキャンプの申し入れがあったという。最大規模は豪州チームの300人。この規模のパラリンピック・チームを受け入れるのは、たやすいことではない。ボランティア組織を立ち上げ、競技別に担当者をトレーニングするなどして、きめ細かくサポートできる体制を築いて臨んだ。

そして、この組織やノウハウ、データベースがレガシーになっている。ロンドン大会後、このボランティアの存在がきっかけとなり、障がい者スポーツの国際大会を招致。地域への経済効果も出ているそうである。はじめにキャンプありき、ではなく、従来からあった取り組みを、キャンプ誘致で次のステージに押し上げた好例である。

ベリー・セント・エドモンズは、多くの市民が参加できる、すそ野の広い国際交流を望んだ。身の丈に合った交流ができるよう、総勢20～30名程度で、地元との交流を望んでいるチームに的を絞った。そして、大会の3年前に、ルワンダのオリンピックとパラリンピック・チームの誘致を実現した。

市を挙げて運営委員会を設置し、アイデアを実行に移していった。掲げたミッションは「スポーツ、教育、文化、ビジネス分野での交流を通じ、地域全体において、事前キャンプのレガシーを、2012年よりはるか先まで

拡げる」。市内16の学校がルワンダの学校の姉妹校になったほか、ルワンダまで走破したチャリティ自転車ツアー、ルワンダ大使館員との交流、在英ルワンダ人とのスポーツ大会、文化プログラムとの連動など、多彩な活動が繰り広げられ、大会前からルワンダとの結びつきを深めていった。

事前キャンプが始まると、市内は歓迎ムードに染まった。強豪チームが非公開で練習するのは対照的に、ルワンダの選手は市民に交じって練習した。さまざまな催しが企画され、大会本番では、市民有志がルワンダ国旗を持って応援に駆けつけた。

レガシーは、言うまでもなく、「地域とルワンダとの絆」である。ルワンダチームが来た日を「ルワンダ友情記念日」に制定して、未永い交流を続けようとしている。



子供たちもオリンピック選手と一緒に練習 (ベリー・セント・エドモンズ)

写真提供：Warwick Lowe

プロフィール

有賀勝 (ありがまさる)

神奈川県出身。早稲田大学政経学部卒。米国ノースウエスタン大学ジャーナリズム大学院修士課程修了。マーケティング局で国内外のプランニング業務に従事し、営業局、新聞局を経て現職。AISTS (ローザンヌにあるIOCのスポーツマネジメント大学院)にて、スポーツマーケティングを講義。訳書に「ブランド価値を高める統合型マーケティング戦略」(ダイヤモンド社)など。